

# 怒りの作法

永田円了

*Anger has its own way*



最近日本人は怒らなくなったように感じる。会社の上司も昔のように部下を怒らない。学校の先生も、真剣に体をはって怒る姿を見かけなくなった。何かみんな優しくなりすぎている。どうしてだろう。怒らないでいれば、波風が立つことはなく、物事をすべて穏便にすませることができる、それでいいと思っているのだろうか。

以前努めていた大学で、同僚の教員が自分の講演テープを流すだけで教義をした。ほとんどの学生は居眠りするが、私語でこそそそしている中、社会人学生が立ち上がって抗議した。この怠慢教員に対して、ふざけるな！と怒りをぶつけたのである。自らの労働から授業料を工面しているこの社会人学生からすれば、当たり前前の怒りである。この当たり前前が何故できなくなってきているのだろうか。

怒りは人の感情の爆発、このエネルギーが火事場の馬鹿力のように古い頑固な殻を破り、社会の新陳代謝を果たしてきた。腐敗した絶対王政の横暴に対する民衆の怒りが、フランス革命を起こし、不合理な人種差別に対する人間の怒りが、アメリカの公民権運動を推進した。また封建的な身分制度に対する若者たちの怒りが明治維新を引き起こしたのである。

つまり人間は怒りによって、歴史を変え世界を動かし、今の幸せを手にしてきたといっても過言ではないのである。



## キレると怒るは別物

キレるも怒るもエネルギーの爆発という点では、同じ現象である。感情マグマが地中で沸騰し、出口を見つけて吹き出すように。ただ違いは、その結果にあると思う。キレたエネルギーは、負の黒い煙を出し、時として凄惨たる結果に至る。(事例：映画「幸せの黄色いハンカチ」より、キレた健さんは、そのつけを6年間の懲役で払うことになる)。一方、怒るエネルギーは、一見その場を壊しているようで、実は高度な意識地場へと私たちを導いてくれる。(事例：映画「若者たち」、兄弟ゲンカ)。非生産的な“キレる”感情爆発に対し、“怒る”ことは、人間の成長、社会の成長にとって不可欠な行動なのである。



高倉 健

キレるのでもなく、ただ我慢するのでもない、第三の道ちの怒り方とはどういう怒りかただろうか。かつてアリストテレスは、「怒りは、しばしば道徳と勇気の武器なり」と言った。他人を傷つけず且つ物事を前進させるパワフルで思慮のある怒り方とは、を下記の事例より検証する。

### <事例 DVD>

田中 涙 怒るから、教えるへ  
冷静に怒るパトラー、「風と共に去りぬ」より  
凄まじい兄弟ゲンカ、エネルギーの高度な出口を求めて、映画「若者たち」  
サンドラ・ブルック、女のイライラ/自分でも分からない  
決断に導く怒り/映画「バグジー」 Say it. Answer me.  
認知症/もの盗られ妄想/瀧本 富美子 (79 歳) の事例  
ニュールンベルグ裁判より/恐れから、怒りへ暴走  
高倉健、三つの怒り/昭和残狭伝、幸せの黄色いハンカチ、居酒屋兆治  
本当に怒ったことあるのか、おまえ?/映画「さらば冬のカモメ」より  
相手の怒りの波長に乗らない/映画「12人の怒れる男」より  
キング牧師怒りのスピーチ/I have a dream  
人種差別に対する怒り/映画「ヘルプ」より  
怒りを歌に/ビヨンセ Listen

